



## テクノロジーと法の未来へ

vol.06

### オンライン学祭を論文に

2020年度のオンライン学祭を終えた1カ月後の12月2日、私はNEC本社において開催された第46回サイバーワールド研究会に一般講演の発表者として登壇していました。

発表したのは、論文「ITLにおけるオンライン大学祭開催に関する諸問題」。本論文は、市ヶ谷田町キャンパスにおける大学祭を統括する学生部の委員であり、私の所属ゼミの担当教員でもある飯尾先生のご指導のもと、同委員会の学生たちと完成させたものです。

大学祭をオンラインで開催するうえで生じた問題と開催当日の結果を、ITL特有のものと大学全般に言えるであろう点に焦点を絞り、最後はオンラ



第46回サイバーワールド研究会での発表の様子

インで大学祭を開催するうえでのメリットとデメリットについて発表しました。

本稿では、Google Analyticsを用いてiTL Fest.特設サイトの来訪者数や滞在時間に関するデータを収集し、その分析をすることで、論理的にオンライン開催の効果や2021年度に改善すべき点を整理しています。授業やゼミ活動のなかで得たデータ分析の知識を実践的にアウトプットできる機会となり、非常に貴重な体験をすることが



iTL Fest.の運営に携わる筆者

できたと感じています。以下に、iTL Fest.開催までの道程と本稿の概要について説明します。

### 急遽決まったオンライン開催

2020年度で2年目となるiTLの大学祭「iTL Fest.」。私は、その実行委員会でゲームなどのコンテンツを制作しており、2021年度からは委員長を兼任します。初年度の開催から悪戦苦闘することばかりでしたが、「2020年は2019年の経験を活かして、もっと充実した学園祭の開催を実現しよう」と、そう決意していた矢先のことでした。

COVID-19の感染拡大、大学の講義のオンライン化、そして史上初の緊急事態宣言。先も見えず、何をすればいいのかもわからない……。そんななか

## データから見る iTL Fest.の オンライン開催

藤山 勇愛美

国際情報学部国際情報学科2年  
東京都立日比谷高校出身

でも唯一、委員会全員で一致したのは「大学祭を開催する」という、その確固たる意志でした。そこで、社会的な背景を鑑み、6月末ごろ、オンラインでの大学祭開催に向けて走り出しました。

### 立ち込める暗雲

慣れない2年目の大学祭で、聞いたこともないオンライン開催。しかし、私たちがわからないからと投げ出すわけにはいきません。2021年度の新入生のためにも、できる限り楽しいものにしてようとiTL Fest.の開催準備を進めました。もちろん、多くの障害が立ちはだかりました。よく「敵は自身」という言葉を聞きますが、一番の障害はまさしく私たちの技術や経験が未熟であるという現状でした。

私たちにできることは、「大学祭を開催する、そのためにはどう行動するべきか」、その点のみを考え、生じる問題一つひとつに身の丈にあった方法で対処することでした。理想があるの



オンライン開催となった iTL Fest.

にそれを実現できない口惜しさはありましたが、開催の日を無事迎えることができたときは、歓喜の極みでした。

## データから見る iTL Fest. G オンライン化

オンラインでの開催は、当日に焦点を絞ると、キャンパス開催の3分の1程度の来場者に留まりましたが、長期間の開催を可能にするその特性上、通算では2020年度の約2.5倍の方に来訪していただくことができました。場所や時間にとらわれないため、地方からの入学者も多い大学だからこ

そ、オンライン開催の需要は高いのだろうと数値的な観点からも確認することができました。

デメリットとしては、ホームページのデザインをプロと見劣りしない程度のものにする必要があるということでした。データとしては、来場者の滞在時間の短さが傑出しており、その原因としてコンテンツ数の少なさ、そしてUX (User experience) の低さが挙げられました。リアルタイム配信は、

UXの向上に効果があることが確認できましたが、それ以外のコンテンツの充実度の低さはやはり悪目立ちしていました。来場者の批評は、対面よりもオンラインのほうがより厳しくなる傾向にあるため、運営する側としては非常に恐ろしく感じました。

### 2021年度へ向けた試み

2021年度は、2020年度に得られたデータを最大限に活かし、より

充実した大学祭を開催しようと、前代未聞のキャンパス×オンラインの2形式開催に向けた準備を進めています。越えなければならぬハードルも想像に難くありません。しかし、「大変だから」というのは諦める理由にはなりません。周りには信頼できる仲間も大勢います。データだからこそ見えること、反対に対面だからこそ感じられること。その両方を大切にしながら、よりよい大学祭の実現を果たす所存です。